INFORMATION AND KNOWLEDGE NEWS

情報知識学会ニューズレター
1998.4.1
49

情報知識学会事務局 発行〒 110 東京都台東区台東 1-5-1(凸版印刷 (株) 内) TEL03(3835)5692 FAX03(3837)0368 ISSN0915 1133

目　次

[巻頭言] 新年度に当たって ..... (藤原鎮男) 1
[紹介] 情報知識学の展望のための情報技術の将来動向等について ..... (岩渕幸雄) 4
[お知らせ] 総会および第６回研究報告会 6
[ご案内] 第４回「Computer Visualization Contest」応募要項 8
[前号補足] 歴史研究と電算機利用ワークショップの開催と題目一覧：補足 . (安澤秀一) 10
[お知らせ] 平成１０年度年会費納入について ..... (事務局) 11
[お知らせ] 読者の声／募集 ..... (ニューズレター編集委員会) 12

【巻頭言】

新年度に当たって

情報知識学会会長、東京大学名誉教授　藤原鎮男

新年度にあたり会員各位にその御挨拶を申し上げ、あわせて本年度の企画へのご協力をお願い申し上げます。本年は会の創立十周年に当たります。このことについては先般、なんらか意義のある記念事業をしたいと考え、前号のニューズレターで会員各位にご提案、ご意見をお寄せくださるようお願いしました。

本会の十周年はただ単に会が創立以来十年を経たということだけではありません。それにつき会長として私は次の二つのことを思います。

一つは、本会の創立の背景についてここで認識を新たにし、現下の情報学の課題に取り組みたいということ。

もう一つは、情報学にとっても今年は大きな節目と思われるので、情報学の専門家集団としての任務をはたすために、本学会としていっそう有意義な活動をしたいということであります。

本会は、日本学術会議の研究連絡会議が改組され、それまで学術文献情報と数値情報の二つの分科会が情報学の名の一研連をつくっていたのを改め、情報学とこの分科会をそれぞれ独立の研連とし、三研連併存の体勢で情報学を担うことにしたのにあわせて創立なされたのでありました。この研連の改組と会の創立には小谷正雄、大塚明郎、湯川泰秀の諸先生がたいへん骨を折られ、実際の対応には前会長の米田幸夫、同副会長の月見里礼次郎、現副会長の藤原譲氏らが奮闘されました。

なぜこの研連の改組、本学会の創立になったかと言いますと、当時のこの時点は、情報のコンテンツの一体・一貫処理が視野に入った時でありました。すなわち、文字情報も、数値フアクト

の情報も、さらには画像情報までが一体処理可能となり、そのデータベース化、その内容の検索、流通まで一望のもとに展望し得、展開を計り得ることになった時なのであります。この時代の趨勢に合った科学技術の推進、分かりやすく言えば情報ソフトの振興を目標にして本会が発足したのであります。それと同時に、本会は二つの国際機関、ＦＩＤ (International Federation for Information) (エフ　アイ　デイ) および　ＣＯＤＡＴＡ (Committee on Data for Science and Technology) (コデータ) の世話団体としてスタートしました。

このことは会員諸氏におかれても認識が薄い向きもあろうかと思いすので少しこの際説明を加えます。

日本学術会議が国を代表して参加が認められている国際機関はこの二つのみであります。そして本会がこの二つの国際機関の実質の窓の役を担っていることは特記すべき事なのです。すなわち、上記研連の学術面の推進を実質担う責任を持っているのです。さらに言えば、ＦＩＤおよびＣＯＤＡＴＡと学術会議の関係は、学術会議そのものの発足にまで遡ることなのであります。

日本学術会議の国際対応は、情報学が他の分野にくらべて最も早い段階で行われました。そうなったわけは、戦後いち早く「科学技術振興」が立国の国是とされたことを受け、学術会議のスタート時の亀山直人会長、八木秀次副会長、その他、松前重義、浜田成徳氏などの会員諸氏が情報学の振興がその鍵であると認識され、国を促して日本学術会議を国の代表機関として、当時唯一の情報関係の国際機関であったＦＩＤに参加させたことに依ります。これは非常な卓見であったと申せましょう。

以上のことがありますので、本会は、現在ＦＩＤの副会長に藤原譲氏を、ＣＯＤＡＴＡ理事会に次田皓氏、東洋部会代表に田隅三生氏を送っています。それ故、国際共同事業や研究、また提案をなし得る最短距離に位置を持つのです。会員諸氏がこのようなことを有効に活かされたらと切に思います。このような特別の地位を持ち得たについては、先輩諸氏のお骨折りに負う所大であり感謝のことであります。

さて情報学の現状です。学術会議が初参加した当時、ＦＩＤは、図書館を主体とする図書の排架や流通文書の分類・整理のコード化に熱心で、とくに、ヨーロッパに興り、そこで重用されていたＵＤＣコードの普及に功績がありました。そのため、ＦＩＤの主力は図書館改革に向かう観がありました。

その後、１９６０年代後半からは科学技術情報の流通は、学術雑誌 (論文) の機械処理、データベース構築を課題とするようになり、ヨーロッパのみでなく全世界に科学技術情報センターが設立されるにいたりました。ＦＩＤはこの大勢に対応し、理事会は図書館関係者のみでなく、科学技術情報センター代表をも迎え、さらに通信ネットワークの時代への対応にも努力して今日に至ったのであります。

ほとんど時代を同じくして、情報処理は、ファクト、数値、さらには近代は画像処理までその範疇に入れる時代になりました。この大勢の推進者はとくに米英であり、有志が主導してＣＯＤＡＴＡを結成するに至ったのであります。画像まで含めた情報処理を旨とするＣＯＤＡＴＡの活動内容は今日のインターネット時代につながると言えましょう。その後、学術情報の流通に通信までが入ったことも重要な展開と言えるでしょう。そうして今の我々はその延長に立つのであります。

冒頭で私は十周年の節目には意義があると申しました。それは学会自身の創立の時点がこの情報の一体・一貫処理の始まりの時であり、十年を経た今は、そのまとめの時期に入ったと思われるのであります。

’まとめ’と言ったことの具体的な意味は、情報処理の最終段として「情報の流通」が科学

技術振興策の焦点に浮上してきたことであります。とくにその担い手としての図書館の復権が浮上したことを言わねばなりません。それはもちろん、その改革、充実を前提にします。それはそれとして、情報学そのもの、体制をいかにすべきかについて識者は今、勧告、建議、答申など思慮を尽くしているのであります。まさしく節目であると思わざるを得ません。

しかしながら、大観すると、言われていることは本学会が創立されたときに標榜したことであり、その具体化が今議論されているのであります。我々も、今こそ創立の理念を再確認し、具体的な活動目標を設定すべきでありましょう。そして、情報学の発展・展開の'まとめ'として取り上げるべきテーマは「応用」であろうと思います。

幸い本会は、平田理事による「危機管理」、根岸副会長、石塚理事、岩淵理事による「SGML」、名和理事による「著作権」などの部会を設けて、この面の活動を進めて来た実績があります。十周年の記念の事業として、「情報応用」の推進をはかることは時宜にかなったことと言えましょう。会員諸氏の倍旧のご協力を願うのみであります。

おわりに、遺憾ながら会誌の発行については会員各位にしばらくご迷惑をお掛けしました。衷心お詫びいたします。この点の改善に本年は全力をつくしたいと思います。それにつき各位の御諒恕を願い、なお活発な御投稿を期待したく思います。

◆◆◆◆◆

Oxford University Press

人文学へのコンピュータ応用の先端誌
LITERARY & LINGUISTIC COMPUTING

コンピュータはすでに人文諸学でも必須のツールとなっています。
Association for Literary and Linguistic Computing の公式機関誌 LITERARY & LINGUISTIC COMPUTING は文学、言語学へのコンピュータ応用のトップ誌としてこの領域を牽引してきました。電子テキスト、テキストエンコーディング、ソフトおよびハードからテキスト分析、意味論、統語論に至るあらゆる領域の最新の研究結果が論じられるばかりでなく、学会レポート、書評、ノートなど学会機関誌らしい多彩な情報が掲載されます。

◆ OUP ホームページ：http://www.oup.co.uk
◆ 英国へのお問い合わせ：jnlinf@oup.co.uk
◆ 英国への電子オーダー：jnlorders@oup.co.uk
◆ 日本支社へのお申し込みは：FAX：03-5995-3415 までお送りください

オックスフォード大学出版局　〒171　東京都豊島区要町 2-4-8　TEL: 03-5995-4931

サンプル希望　　購読希望（97 年購読料：＄67）　…○でお示し下さい

御氏名: _____
所属: _____
FAX/TEL: _____

◆◆◆◆◆

【紹介】

情報知識学の展望のための情報技術の将来動向等について

情報知識学会理事　岩渕幸雄

(1) はじめに

情報知識学会は創立１０周年を迎えるにあたり、「２１世紀の情報化社会を先導する情報知識学の展望」を主題とする研究報告会の準備を進めている。

併せて、このような研究報告会の他に、「共同研究テーマ」が募集されているので、すでに多くの会員の皆様が提案や要望の準備をされている頃と思われる。そこで本稿では、情報知識学の展望や将来の発展のための青写真づくりに役立つ内外の情報等を紹介してみることにした。

(2) 情報知識学の発展を促す内外の動き

(2.1) 我が国の文教政策における情報学への大きな期待

文部省では、学術審議会の情報学部会における審議の中間報告として、昨年７月に「情報学研究の推進方策」を公表している。

この報告における今後の推進方策としては、欧米に対する遅れを是正するとともに、世界の学術の振興に貢献するため、人材養成が急務であり、情報の意味や価値を見据えた、情報に関する学問の体系化に向け、必要な研究を進めることなどが強調されている。

このような推進方策は、本学会における共同研究を進める際の参考になるものと思われる。

(2.2) 情報知識学の基盤を支える情報技術の急速な進展（科学技術庁の技術予測調査より）

科学技術庁では、我が国の技術発展の方向を探るため、科学技術分野における技術予測調査を 1971 年以降、これまでに約５年間隔で実施して、その第６回目の最新版が昨年公表されている。この調査には今回はじめて情報分野の技術予測が追加されたので、情報知識学に関連する部分を［表－１］のように要約してみた。

この技術予測は適中率も高いので多くの研究機関で利用され、将来計画の立案に活用されている。今回の調査は、1996 年から 2025 年までの３０年間の主要技術開発課題 2026 件について、我が国を代表する専門家（4868 名）が予測している。この専門家の中には、情報知識学会の会員の方々も多くおられたはずである。なお、ここで用いられた予測方式はデルファイ法であって、米国のランド・コーポレーションが実用化した実績のある方式である。

ここで［表－１］からもうかがえるように、情報技術の将来は明るい事例が多いので、これらの技術を活用する情報知識学の展望も一段と開けてくるものと思われる。

(2.3) 米国政府の情報化政策の重点指向と大規模投資による情報化社会への急速な展開

米国政府の情報化重視の政策は、昨年来、急速に展開されている。例えば、昨年末にクリントン大統領が発表した超々ＬＳＩ「スーパーチップ」開発計画があり、この発表 の際の注目発

言がある。例えば「もはや、世界は軍事力ではなく、情報力で動くものだ。米国は、その世界のリーダーになるのだ!!」と。この発言は、次世代インターネット(NGI)として、現用の100倍から1,000倍の情報伝達速度をもつシステムの実用化のため、約1億ドル投入する計画にもつながるものと思われる。今後の情報化社会は益々明るくなるとともに、新たな技術開発競争の激化が始まっている。

〔表－1〕情報知識学の展望のための情報技術の予測事例

応用分野	具体的な予測事例	実現予測時期	新たな研究課題等
(1) 情報解析	図書・資料の要約・抄録を自動的に行う装置（要求により任意の圧縮比で出力ができる）が開発される。	１０年後 (2008年)	70%位の精度であれば統計処理等で可能。
(2) 意味解析	自動学習により知識を矛盾なく整理していく知識ベースが実用化される。	１５年後 (2013年)	分野を限定して実現。 分野辞書の開発が必要。
(3) 電子博物館	個人の関心事に合わせて編集される電子新聞や電子博物館が普及する。	９年後 (2007年)	情報量の増加に伴い、情報整理の技術も必要。
(4) ﾏﾙﾁﾒﾃﾞｨｱ	文字・音声・画像・映像を対象とした検索（例えば鳥の鳴き声、スケッチなどで検索できる）と応答を行うマルチメディア百科事典が普及する。	８年後 (2006年)	マルチメディア・データベースの研究等が不可欠。
(5) 可視化	裁判の判例のような複雑な因果関係の理解を容易にする可視化システムが開発される。	１３年後 (2011年)	判例のＤＢ化が前提。 個別分野の開発は５年位。
(6) 知的所有権	マルチメディア著作権に関する社会的なルールが確立し、マルチメディア情報の生産と流通が拡大する。	６年後 (2004年)	国際的ルールの確立が必要。技術より精度の問題。
(7) 情報流通 SGML/CALS	関連企業間における情報管理（受注、設計、製造・運用・保守）を統一的に取り扱うシステムが普及する。（SGML/CALS の普及）	７年後 (2005年)	民間企業への実用化が進展中。
(8) 機密保護	悪質なハッカーの攻撃から個人や集団のプライバシーや機密が保護されるような信頼度の高いネットワークシステムが普及する。	９年後 (2007年)	技術的課題の他に倫理教育が重要になる。
(9) 情報流通 （通信ｼｽﾃﾑ）	セキュリティが高く、リアルタイム性の高い情報も送れる次世代インターネットが実用化され、電話サービスや動画像放送が実施される	５年後 (2003年)	ＮＴＴが計画中のＯＣＮへの期待が大きい。

（出典等）この予測事例は、第６回科学技術庁技術予測調査「2025年の科学技術」から引用

【お知らせ】

総会および第６回研究報告会

情報知識学会・平成１０年度総会および第６回（1998年度）研究報告会を下記の通り開催しますので、万障お繰り合わせのうえ是非ご出席ください。

研究報告会はどなたも入場無料です。会員以外のかたも参加できますから、大勢の皆さまをお誘いください。当日のプログラムは現在作成中です。当日以前に入手したいかたは、同封の総会出欠票（葉書）にてお知らせください。５月中旬に郵送します。なお、電子メールおよびホームページでもプログラムをお知らせします。

準備の都合がありますから、参加未定のかたも同封の葉書にご署名のうえ、至急返送してください。

＜　記　＞

・日　時　　平成１０年５月２３日（土）　受付開始　９：３０～
※特別講演　１０：００～
研究発表　１１：００～
総会　１６：００～
（時間帯は若干変更する場合もあります。）

・会　場　　凸版印刷株式会社　本社ビル１階ホール
東京都千代田区神田和泉町１（別図参照）

・出席者　　情報知識学会会員ほか、一般参加も歓迎（参加費無料）

・資　料　　学会員および当日参加者には会場受付で「第６回研究報告会講演論文集」を¥2,000で頒布します。（通常は¥3,000）
当日出席されなくても、ご希望のかたには後日郵送します。
（学会員¥2,000）送料は無料です。

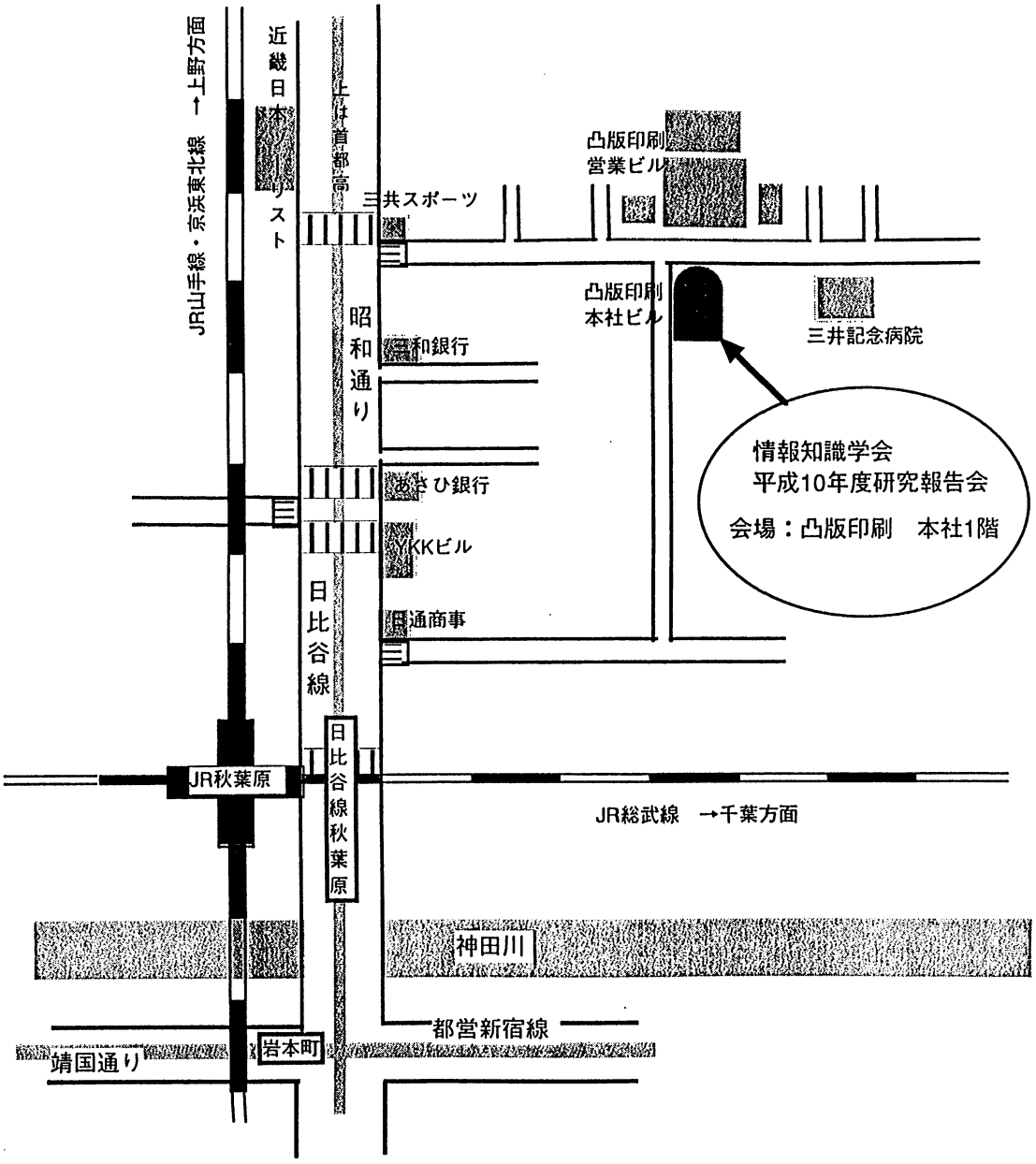
・昼　食　　弁当は用意できませんので、ご持参いただくか、会場周辺の飲食店をご利用ください。コンビニエンスストアもあります。

・出　欠　　参加・不参加にかかわらず、同封の葉書は必ずご返送くださるようお願いします。

※情報知識学会創立１０周年記念特別講演「情報知識学の現状と展望」
情報知識学会副会長　神奈川大学教授　藤原　譲

会場案内図

JR「秋葉原」駅東口（昭和通り口）より徒歩約１０分
営団地下鉄「秋葉原」駅（上野より出口）よ徒歩約１０分
都営地下鉄「岩本町」駅より徒歩約１５分



【ご案内】

日経サイエンス社主催、情報知識学会　他　後援

第４回「Computer Visualization Contest」
in "Computer Visualization Symposium '98"
— 応募要項 —

協賛：(株) ケイ・ジー・ティー、日本電子計算 (株)
協力：オリックス・レンテック (株)
後援：情報知識学会，(社) 可視化情報学会，(社) 情報処理学会，日経 CG，他

《開催趣旨》

総合科学誌「日経サイエンス」は"理学・工学・医学から経済まで"各分野の研究者・学生などを対象に，教育，観測・計測，集計・統計など科学技術計算の結果をコンピュータで可視化した作品を募集し審査する，第４回「コンピューター・ビジュアリゼーション・コンテスト」を開催します。第４回目となる今回は，各専門分野の第一線で活躍する査読委員により採択された応募論文の発表の場"コンピューター・ビジュアリゼーション・シンポジウム'98"を開催し，その中でコンテストを実施いたします。シンポジウムで発表された全作品は，1999 年２月号（12 月 25 日発売）の「日経サイエンス」にも掲載し，約３万人の読者をはじめ，広く紹介します。また，日経サイエンスのホームページでも紹介いたします。何卒奮ってご応募下さいますようお願い申し上げます。

《募集作品対象》

（１）実験計測結果の可視化（２）解析結果の可視化（３）画像処理／ボリュームレンダリング（４）データ解析，プレゼンテーションほか（５）その他，ビジュアリゼーションに関する作品（６）バーチャルリアリティ，アーティスティック CG（ゲーム，シミュレータほか）

《"コンピューター・ビジュアリゼーション・シンポジウム' ９８"の開催》

●各専門分野から選出された査読委員（1 分野 2〜3 名を予定）が審査を行ない，"コンピューター・ビジュアリゼーション・シンポジウム'98"参加にふさわしい優秀な可視化論文 15 篇を，下記エントリー分野の中から 採択します。
（１）「サイエンス」　（２）「エンジニアリング」（３）「流体」（４）「医学・生物」（５）「数学・統計」「情報」「教育」（６）「VR，アーティスティック CG」（７）「ノンセクション」

《"コンピューター・ビジュアリゼーション・コンテスト"》

「CVC 審査委員会」において、シンポジウムで発表された作品の中から下記賞を授与します。
※講演者のプレゼンテーションの優劣は，審査の対象とはしません。作品自体を審査します。

●「Computer Visualization Contest 審査委員会」（敬称略・五十音順）
委員長：太田次郎（江戸川大学学長）
委員：大村皓一（宝塚造形芸術大学教授）／小林敏雄（東京大学教授）／戸川隼人（日本大学教授）／中嶋正之（東京工業大学教授）／藤代一成（お茶の水女子大学助教授）／森啓（明星大学教授）／松尾義之（日本経済新聞社出版局編集委員）

●賞　*印は新設賞　※作品制作ソフトが AVS であるか否かは審査の対象とはなりません。
★最優秀賞「AVS 大賞」1 点―賞金 30 万円　賞状・楯
★優秀賞「KGT 賞」1 点―賞金 10 万円　賞状・楯
★優秀賞「JIP 賞」1 点―賞金 10 万円　賞状・楯
★優秀賞「日経サイエンス賞」1 点―賞金 10 万円　賞状・楯
★特別賞「ニューフロンティア賞」1 点―賞状・楯
新分野での活用や，ユニークな作品を対象とします。
★特別賞「ヤング・ビジニア（Young Visineer）賞*」1 点―賞状・楯
高専学生，大学学部学生を対象とします。
★特別賞「静止画賞*」1 点―賞状・楯
静止画作品のなかで最も優れた作品に授与します。
★「入選」8 点―賞状を授与

●応募申込締切日―６月３０日（火）　●作品提出締切日―７月１７日（金）
●シンポジウム参加論文「採択」発表―８月中旬　●参加論文のリライト締切日―９月中旬
●シンポジウムについて
・日時―１０月３日（土）午前 11 時～午後 4 時（於：お茶の水女子大学理学部 3 号館 701 教室）
・プレゼンテーション時間――1 作品 15 分以内（12 分講演，3 分質疑応答）
・シンポジウム入場料――無料。ただし，プレゼンター以外は事前申込が必要。
電子メールか FAX，官製はがきに，1．氏名　2．学校名もしくは勤務先名　3．郵便番号　4．ご住所　5．電話番号を明記の上，CVC 運営事務局「コスモピア」までお申込み下さい。折り返し入場券（ハガキ）をお送りします。なお定員になり次第締め切らせていただきます。
・予稿集――論文を予稿集にまとめ，会場にて 1 部 3,000 円で頒布させていただきます。
（プレゼンターには 1 部を無料で頒布，後援団体所属の方には 2,000 円で頒布します）

◆応募申し込み先・作品の送り先――株式会社コスモピア「ＣＶＣ事務局」
TEL:03-3401-0611　FAX:03-3401-5500　E-mail:suseri@cosmopia.co.jp
◆シンポジウム、コンテスト内容のお問い合わせ先――日経サイエンス社　CVC 担当
TEL:03-5255-2831　FAX:03-5255-2863　E-mail:horigoh@tokyo.nikkei.co.jp
過去の入賞作品を日経サイエンスのホームページでご覧になれます！
http://www.nikkei.co.jp/pub/science/

【前号補足】

「歴史研究と電算機利用ワークショップの開催と題目一覧：補足」

安澤 秀一：駿河台大学文化情報学部教授

情報知識学会ニューズレター48号（１９９８．０２．０１）に標記の報告を掲載した際に、第3回の報告者氏名と発表題目を欠落させてしまったので、ここに補足させて頂きます。補足については神立 孝一さん・児島 秀樹さんの助けを得ました。感謝いたします。

第3回：「歴史研究と電算機利用の可能性ー歴史系大学院院生を対象とするワークショップ」
期日／場所：1993年（平成5年）9月18・19日：駿台電子専門学校
研究集会オーガナイザー：永村　真（日本女子大学教授）
後援・協力：駿台電子専門学校・内外エレクトロニクス・富士通

０１．　藤原　鎮男情報知識学会会長：開会挨拶
０２．　安澤　秀一（駿河台大学）：基調報告
０３．　千速　敏男：美術史研究文献のドキュメンテーション
０４．　永村　真　：文字列・画像データベースシステムの仕様と開発
０５．　大槻　豊寛：文字列・画像データベースシステムの概要とデモ
０６．　高山　有紀：醍醐寺史料データベース構築について
０７．　山田　哲好：ＭＡＲＣ－ＡＭＣと史料館の史料所在データベース
０８．　針谷　武志：多摩市史編纂における情報機器の利用について
０９．　討論・総括：情報科学研究者の人文情報処理へのかかわり・シソーラスの機能と有効性・資料分類の意義・情報作成者の意図への配慮・人文情報処理への情報科学からの技術的な提言

【お知らせ】

平成１０年度年会費納入について

今月から平成１０年度となりましたので、学会員の皆さまに平成１０年度年会費の納入をお願いします。

１．納入方法と金額

同封の郵便振替用紙（赤色の払込取扱票。手数料は学会負担）をご利用のうえ、本年５月末までに納入してください。

この用紙を紛失された場合、郵便局から青色の払込取扱票で

口座番号 00150-8-706543　加入者名［情報知識学会］へ払い込むこともできますが、手数料は自己負担になります。

年会費金額は、正会員（個人会員）８千円、学生会員４千円です。

なお、平成 10 年度から CODATA 部会費 (¥2,000) は不要となりました。

賛助会員（法人会員）は各々の金額が異なるため、近日中に請求書を別送します。

２．前納されたかた

この用紙は全員に同封しましたので、すでに平成１０年度分を納入されたかたにも届きます。悪しからずご了承ください。用紙は保管して別の機会にご利用願います。

３．未納分のあるかた

平成９年度以前の年会費および臨時会費を未納のかたは、その分も合わせて納入してください。このニューズレターをお届けした封筒の宛名ラベルには、会員各自の会費納入状況を次のように印刷してあります。どうぞ、ご確認ください。[　] の中は納入された年月日を示しており、空欄ならば未納です。

例えば、以下のようになります。

1996 [960516]　1997 [970428]　臨時 [971230]

↓　↓　↓

↓　↓　1997 年臨時会費３千円を 1997 年 12 月 30 日に納入した。

↓　1997 年度年会費５千円を 1997 年４月 28 日に納入した。

1996 年度年会費５千円を 1996 年５月 16 日に納入した。

４．その他

事務簡略化のため、個人会員のかたには原則として請求書・領収書を省略していますが、必要な場合はどうぞご遠慮無く事務局へお知らせください。

平成９年度限りで退会なさるかたは、至急、ＦＡＸ、郵便、電子メールのいずれかで退会届を事務局へお出しください。その際、平成９年度までの年会費、臨時会費など未納分があれば全額納入してください。

情報知識学会事務局

TEL:03-3835-5692　FAX:03-3837-0368　E-mail:LDE01013@niftyserve.or.jp

【お知らせ】

読者の声／募集

ニューズレター編集委員会では情報知識学会会員間の相互交流に役立つように「読者の声」欄をニューズレターに設けることにしました。研究集会の短いお知らせや協力者の募集などの学会員向けのメッセージを随時掲載します。

原稿は電子メールにて学会事務局宛 (LDE01013@niftyserve.or.jp) に『ニューズレター「読者の声」原稿』と明記してお送りください。

ニューズレター編集委員会

.....

訂正とお詫び

ニューズレター No.48 で次のような間違いがありました。謹んで訂正させていただくとともにお詫び致します。

p.3 冒頭
誤「情報処理学会創立１０周年記念」　→　正「情報知識学会創立１０周年記念」

ニューズレター編集委員会

.....

■編集後記

桜前線の北上とともにすっかり春らしい陽気になって来ました。私は大学で１年生対象の計算機演習を担当しているので、この時期になると「今年はどんな突拍子もないことをする新入生がいるだろうか？」ということが不安とともに一種の楽しみになっています。

新たにニューズレターに「読者の声」欄を設けることになりました。本格的な記事とは別に気軽な情報提供・交換の場として活用してもらえればと思います。不明な点などがあれば事務局を通して編集委員会にお聞きください。

ニューズレター編集委員　　阪口 哲男

■複写をされる方に

R <学協会著作権協議会委託>
日本国内における、当ニューズレターからの複写許諾は、学協会著作権協議会から得てください。
学協会著作権協議会
〒107 東京都港区赤坂 9-6-41
TEL:03-3474-4621, FAX:03-3403-1738
アメリカ合衆国における複写については、Copyright Clearance Center, Inc. から得てください。
Copyright Clearance Center, Inc.
222 Rosewood Drive, Danvers, MA. 01923, USA
TEL: 508-750-8400, FAX: 508-750-4744